

大鹿スケッチ

2011
文月
前志満くみ
第25号

昭和36年伊那谷は大きな自然災害に遭いました。昭和36年梅雨前線豪雨通称36災害さんろくさんがい伊那谷で死者行方不明者136人、災害史上まれにみる大きな被害でした。奇しくもその災害から50年の節目の年に大きな震災。さらに現在進行形の人災も併発しこれからの社会の在り方が大きく変わってゆく二〇〇一年に一度の現場に私たちが遭遇していることに使命感を感じずには居られません。

御報告：東日本大震災を受け5月に立ち上げました大鹿村の「土着力」を生かして被災地支援。この企画は「ひと口 3000 円」で大鹿村の「お野菜」を被災地にお送りするという企画です。
今まで以下の皆様にご賛同を得、お志を大切にお預かりしております。陶山様、荒井様、塚田様、稲葉様 誠にありがとうございます。5月下旬被災地に直接足を運び、まだ今後の生活の見通しもままならないという方にも多くお会いし、ボランティアをさせて頂くなかで感じたことは、この企画が与えるだけの個人的な思いが先導した支援になるのではないのかという恐れでした。しかし、本格的な夏を迎えるにあたって現地からの情報によれば「お野菜」の需要が高まっているのは確かです。頂いたお気持ちを形にすべくしっかり活動させていただきま。ニーズは日々刻々と移り変わっています。村内の友人も被災地ボランティアに参加しており、先ずはそんなつながりから「土着力」支援企画を始めたいとおもいます。震災後「拡散」「縮小」というテーマが与えられていると思います。支援としては小さい、多くのかたに行き届かないものかもしれませんが、個人のつながりを高めていくことをすればその先が見えてくるように感じています。また追って御報告させていただきます。引き継ぎご理解のほどをよろしく願いいたします。

●5月26日 泥かき作業まだまだニーズがある泥かき作業。石巻市釜会館付近(26日現在19人の方が避難生活を送っている)の築山の民家(鈴木さん宅)の泥かき作業。県道を挟んで海側は被災し、反面反対側では普通の日常を送っている極端な地域。専修大学 どころか専門の「リバイブ」というチームと合同で作業に当たる。強烈なおい！！へどろと津波で運ばれてきた米が発酵し、また近くに堆肥センターもあり被災しているため強烈な匂いと、粉じんにまみれながらの完全ガテン系一日作業。どうに泥をつめる。流れついた柱や家財道具などを撤去。家主の鈴木さんのニーズとしては、旦那さんが三味線をひかれるため「ばち」がでてきたら回収してほしいという。

それ思い出の写真。家は取り壊すということだが、重機で一気にガシャンとやるのではなく、長年暮らしてきた家を最後まで大切にそして思い出の品を手元に戻したいというのがニーズ。そこによりそい、声掛けをしながら作業をしました。この日はさすがに自衛隊のお風呂に行きました。熱めのお湯がきもちいい。

●27日 石巻市市役所周辺の商店街にて 炊き出し
商店街のお声掛けもあってこの日は、民謡コンサート+炊き出し。ピースワーカーズとしてはお好み焼き、コーヒー、スイーツを提供お隣では、地元の方がチャイ屋さんをひらく。前島は、簡単にコーンフレークとマシュマロとチョコでチョコレートバーを提供。和やかな雰囲気であつという間に完売(?)完配布)民謡コンサートをされたチームは東京からボランティアにきていて、滞在中は炊き出しと民謡コンサートのあわせて活動されているということでしたMc担当していた50代の男性は歯切れのいい感じでコンサートを進行されていました。あとでお話し伺うと「本当は歌などこんな時に披露したくないんだ、多くはまだ歌を歌おう、楽しもうなんていう気持ちにはなっていない。それでも、音楽には前向きにする力があるから会場の雰囲気を読んで、距離を測りながら少しでも後押しできればと続けている、とつても神経をする減らすことをやっている」と話されていました。地元の方の温かい声掛けにボランティアの方が勇気づけられているのも本当のところ。ボランティアにはいり2カ月が経過した人や、何度も来ているかたにもお話しを伺ったがゼロ、それ以下のスタートで、毎日自分のやったことが良くも悪くも帰ってくることにやりがいを感じている様子。人と人とのつながりが希薄な社会傾向にある中、被災地ではそれがあつても若者たちをひきつけているのではないだろうか。ここから何が始まるのか、無力感を感じる半面、希望の光も差し込んでいる。復興と同時に新しい世の中の形成に向けた発信ができるのではないだろうか。

●28日 石巻市役所 FM石巻視察 商店街で買い物 ~ 帰路 どころかで回収した持ち主がわからない写真を洗浄作業をしているという旧市役所に届け、FM石巻へ。市役所4階のサテライトスタジオから番組を発信している。行方不明者情報やお風呂、炊き出し情報が通常放送にさしこまれている感じ。この日はイベントのため直接お話しはできなかったが被災から1日半後、放送を担当したパーソナリティーの方とも電話でコンタクトをとることができた。被災から1日半情報が一番必要な時に 放送できなかったことが悔やまれるということだった。対策として、もしもの時に放送できる3、4の手段を日ごろから持っておくことが大切とのこと。

S20年戦後の復興は焼け野原から始まった。そこには人の力でだけ切り開くエネルギーがあった。がれきの撤去をし、小さいながらもお店を出し始め...それに被災地がかさなる。人のエネルギーしかない現場。きつとサーモグラフィでもし日本列島をみるこができたら東北は真っ赤であろう。ボランティアにも形は様々、想像力を膨らませてもなかなか現地とつながらない事が大きいことが分かった。しかしこれらも現地とできる限り規模は小さくても繋がっていくことが大切だと感じた。今も一歩はどんどん動き続けている。被災地の痛みを分けて頂き一人ひとりが自覚を持って自立して生きるこの大切さを感じた。



先日、現地で一緒に活動させていただき、現在も石巻市で支援活動に当たられている辻さんから次の内容のメール(6/30)が届きました。「石巻の被災地もだいぶ片づいて、復旧のペースが速まっているように感じます!! 波の被害を受けた事業所やお店も少しずつ再開をはじめて復興の兆しも少しずつ見えはじめてきました。僕たちもこれからの方向性をもう一度考えてみる時期なのかなと感じてる今日この頃です。」被災者の方はそろそろハビリに入っていく頃なのかも知れません。

牡鹿半島



渡波地域での大作業



築山の泥かき作業



お好み焼き屋さんは茅ヶ崎から



石巻商店街アットヘッズ(衣料品店)

みかさんたちとボランティアメンバー

